

## アメリカ植民地社会におけるタヴァン

### —— その機能と役割について ——

岡 本 勝

#### はじめに

アメリカ合衆国では、テンペランス運動に関する歴史研究が、これまで数多くなされてきた。過度の飲酒に警鐘を鳴らすことを目的として19世紀前半に組織化されたこの運動は、牧師による説教や小冊子の配布など「モラル・スエージョン道徳的説諭」と呼ばれる手段を駆使して、直接飲酒家に節酒や禁酒の意義を訴えた。しかし19世紀後半になると、それは飲酒家ではなく酒場と酒造業者を第一の標的とした禁酒法——酒類の製造・販売・輸送等<sup>サルーン</sup>を禁止する法律——の成立を目指す運動（禁酒法運動）へと変質したのである。

その背景として、当時飲酒量が減った反面、民族的・文化的に多様な移民の増加や、産業化および都市化の進展によって引き起こされた社会的変化があり、酒場を取り巻く状況が大きく変わったことがあげられる。多元的アメリカ社会の出現にともない、以前はあまり問題視されることのない酒場が、ワズプを中心とした禁酒法運動家たちにとって徐々に黙視できない悪徳を象徴するものになっていった。この運動を肯定的に捉える研究によれば、移民労働者が主として集まる酒場は、過度の飲酒を引き起こすだけではなく、売春やギャンブルなどとも結びつき、さらには腐敗にまみれたマシーン政治の温床にもなったというのである。<sup>1</sup>

しかし、このような視点の対極から酒場を眺めれば、そこは必ずしも排除されるべき場所ではなくなる。それどころか、地域社会にとってなくて

はならない「空間」としての再評価すら必要となるのである。この点に関して、すでに筆者は19世紀後半から全国禁酒法の施行（1920年）までの酒場がもつそのような側面を、別の機会に論じた。<sup>2</sup> 同様に、酒類を提供する場所が地域社会にとって必要な「空間」であったというのは、遠く遡って植民地時代にも当てはまると考えられる。つまり、そのような場所が、個々の人びとの間に共同体意識を醸成させるのに重要な役割を果たしたことは、入植が開始されると同時に始まったのである。<sup>3</sup>

イギリス人による新大陸への入植開始から独立革命を経て建国期にいたるまで、主として酒類販売を行った店舗——タヴァン<sup>4</sup>——は、19世紀後半以降の酒場のように、非難や攻撃の対象となることはあまりなかった。しかし、それが果たした役割については、「地域社会の中心」であったという簡単な描写はしばしばなされるものの、その内容を精緻に論じた研究はこれまで行われてこなかった。そこで本稿では、そのようなコミュニティ研究の空白を埋めるべく、植民地時代から建国初期にかけてのタヴァンに対して新たな評価を試みたい。このとき、タヴァンが個々の住民を結びつけるうえで果たした機能や役割を検証することで、そこがなぜ「地域社会の中心」と位置づけられたのかについて明らかにしたいと考える。

## I：タヴァンとその規制

1607年のジェームズタウンと1620年のプリマスにおいて始まった北米大陸を舞台としたイギリス人による植民地建設の試みは、当初の壊滅的な危機を乗り越えて進められ、他の新しい入植地の誕生により、その地理的範囲は拡大していった。その過程で、相対的に大きな自由裁量権が各共同体に与えられたニューイングランドでは、民主的な手段で自治を実践するために、入植者たちが話し合いを行う空間が必要とされた。

ニューイングランドにおける共同体づくりで、住居の次に建設されたのは役所などの屋舎ではなく、神に祈りを捧げるための建物だった。しかし

そこは、人びとが魂の救いを求めにやって来る祈りの場としてのみ機能したわけではなかった。植民地時代、特に非国教徒が支配したニューイングランドで、当初そのような場所が「チャーチ」ではなく「ミーティング・ハウス」(meeting house=以下、「教会」と呼ばれた)は、そこがさまざまな会合を開くための空間であったことを示唆するものである。しかし、<sup>ミーティング・ハウス</sup>教会は当然のことながら娯楽性に乏しく、かたくるしい雰囲気があったため、すぐに人びとは日々の緊張した生活から解放してくれる第二の「空間」を求めた。旅行者には止宿ができ、また住民には飲酒と会話が楽しめるそのような建物は、「地域によっては教会に隣接して造られることが〔設置許可法上の〕条件」になっており、まさにコミュニティの中心に位置したのである。<sup>5</sup>

植民地の始まりから、タヴァンは人びとにとって必要な施設であったため、それがない共同体には開設するよう各植民地政府は指導した。コネティカット植民地では1644年に、またマサチューセッツ湾植民地では1656年にタヴァンの建設と維持が命じられ、それを行わない共同体には、罰則を科す法律が制定されたほどである。<sup>6</sup> もちろん、このような政策は旅行者の便宜を図ることを第一の目的としたが、同時にタヴァンが地域社会にとって不可欠な施設であるという認識が、指導層にあった点も見逃されるべきではない。

その一方で、タヴァンは酒類を提供したため、その扱いについては特別な配慮がなされるべきという議論もあった。過度の飲酒という問題を引き起こさせないようにするためには、この店舗に対して何らかの規制が必要だと考えられたのである。それは、すでにイギリス本国では過度の飲酒が大きな社会問題となっており、この問題が海を越えて持ち込まれると、植民地建設の試みが失敗するのではないかと指導者たちが恐れたからだ。1630年に植民団を率いてセイレムに到着したマサチューセッツ湾植民地の初代総督ジョン・ウインスロップ(John Winthrop)も、乗組員たちに向かって「……分別あるとされる大人たちによる不摂生な飲酒は、[これから

建設しようとする] 社会において常に起こりうる過ちとなろう」と警告を發している。<sup>7</sup>

タヴァン経営が安定的に維持され、しかも過度の飲酒を防ぐことを目的に考え出された方策が、酒類の小売販売を行う者に、営業許可証（以下、「ライセンス」）の取得を法律で義務づけるというものであった。この制度は、ニューイングランドだけではなく南部や中部植民地でも実施された。ニューイングランドにおいてライセンスを發行する権限は、通常ガヴァナー カウンティ・コートカヴァナー カウンティ・コート 総督、地方裁判所、もしくは町行政委員のうちのいずれかに与えられており、当初は総督によって行使されることが多かったが、植民地時代の末期には他の二者が主にその任に当たるようになった。<sup>8</sup> しかし、ペンシルヴァニア植民地では、地方裁判所の「推薦」を受けて総督が「付与」というように権限が分割されたほか、特にフロンティア地域においては、巡回判事にそれが委ねられた。<sup>9</sup>

誰がライセンス付与の権限を行使したにせよ、当初彼らはタヴァンの数を各共同体とも数軒程度に制限することで乱立を回避しようとした。例えば、ヴァージニア植民地では1676年に「オーディナリおよび酒類価格に関する規制法」が成立し、ライセンス發行数が各共同体とも2軒に限定された。<sup>10</sup> その結果、コットン・マザー（Cotton Mather）が、名著『アメリカにおけるキリストの大いなる御業』（1702年）の中で「きわめて神聖な人物」と評したように、ライセンスを受ける者の社会的地位は相対的に高く、中にはタウンの役人、植民地議会の代議員、治安判事などの公人も多数含まれていた。<sup>11</sup>

また、タヴァンの店主には牧師補佐役など教会関係者も多く、マザーが活躍した18世紀への世紀転換期のケンブリッジでは、タヴァンは「最も卓越した組合教会の牧師補佐役によって長年切り盛りされており、彼が引退した時には息子が後を継いだ」という記録が残されている。<sup>12</sup> 余談だが、ハーヴァードやイエールという宗教指導者など当時のエリートを養成する目的で開学された教育機関が、親の社会的地位が高い順に記載する学生名

簿の中で、タヴァン経営者の子息がしばしばクラスの主席として扱われていた点は興味深い。<sup>13</sup>

ところで、経営者たちは、秩序維持を重視する植民地政府によって「社会統制の担い手」として期待されたため、店内での過度の飲酒に対する責任が負わされた。<sup>14</sup> この点に関して、各植民地ともそのような飲酒を法律によって定義しており、それを犯した飲酒家は鞭打ち刑や罰金刑などの対象になったほか、それを黙認した経営者にも罰金が科せられた。まずマサチューセッツ湾植民地では、過度の飲酒とは「30分以内に2分の1パイント（280ミリリットル）以上のワインを消費すること」から生じると規定された。<sup>15</sup> したがって、後年の酒場でのように、「客に酒瓶ごとわたして、各人の限界まで自由に飲ませることはなく、主人は『ジガー』と呼ばれた小さなグラスに一杯ずつ注ぎ入れた」。<sup>16</sup>

また、プリマス植民地では、何が過度の飲酒状態あるのかが1646年の法律の中に明記されていた。それによると、「飲酒が原因で会話中に舌が纏れたり暴言を吐いたりすること、または歩行中によろめいたり、嘔吐したり、仕事に従事できない状態」がこれに該当した。<sup>17</sup> さらに、ニューヘヴン植民地でも「よろめいたり、千鳥足で歩き……1人で立ち上がることができない」状態の者が処分の対象になった。<sup>18</sup>

一方、タヴァンの店主に負わされた責任は、過度の飲酒をさせないこと以外にもあった。例えば、所有者の許可なくタヴァンへやって来た奴隷や年季奉公人に飲酒させることは禁止され、違反した店主には高額の罰金——最高30ポンド——を科した植民地もあった。このような「労働者」が締め出された結果、植民地時代にタヴァンへ来る客が属す社会階層は比較的高かった。ちなみに、そこへ入れなかった下層の人びとが飲酒できなかったわけではなかった。それは、彼らがライセンスをもたない違法な店舗を利用することができたからだ。<sup>19</sup>

さらに、ライセンス法に付随するものとして、ニューイングランドの多くの植民地では当初タヴァン内でのダンス、ギャンブル、タバコ、菓子や

パンを食べながらの飲酒、そして売春行為などが禁止されたほか、閉店時間（通常午後9時）や安息日と説教日の営業禁止を定めた法律もあった。<sup>20</sup> しかし、これらの点に関して、南部植民地ではダンスなど一般に規制されていなかったものもあり、たとえ規制されたとしても、ニューイングランドほど厳格に施行されなかった。

マサチューセッツ湾植民地最初のライセンス法は、入植開始3年後の1633年に成立し、サミュエル・コール (Samuel Cole) という人物がタヴァンの経営者第1号になった。<sup>21</sup> 彼はウインスロップ総督の住居から通りを挟んで向かい側に「コールズ・イン」を開店させた。マサチューセッツ湾植民地では、その後4年間に5軒が新規参入したが、17世紀中頃には目立った増加は見られなかった。<sup>22</sup> タヴァンの軒数を最小限に止めておこうとする傾向は、17世紀後半に入植が始まった他の植民地でも、入植間もないころには認められた。

しかし、人口が増えて共同体が周辺部へ拡大するようになると、当然のことのようにタヴァンの増設を求める声は大きくなった。そのような声を無視して軒数を制限し続けることは、違法な販売を助長するだけであると、指導者たちは気づいていた。また、共同体が社会経済的に発展すると、隣接する共同体との間で人の往来が頻繁に行われるようになり、より大きな植民地社会が形成された。このとき、旅行者の移動を可能にするために街道が整備されたが、それに沿って共同体の中心から遠く離れた辺鄙な場所にも、タヴァンが必要となったのである。

早い植民地では17世紀末から、それ以外でも18世紀に入ると、ライセンスの発行数は急速に増えはじめた。これは、当然のことながら人口が多い地域やその周辺において顕著で、ボストンではタヴァンの軒数が18世紀初頭に70軒を越え、そして中頃までにはその倍以上へと増えたのである。<sup>23</sup> このように、植民地社会が成熟するにしたがって増加したタヴァンだが、これを過度の飲酒と結びつけて否定的に眺める者もいた。そのような人たちは、店主の人格低下が酒類の乱売を招き、それが過度の飲酒と結びつく

ことを問題視した。彼らによると、店舗数が増加すると、必ずしも「町の名士」が経営者にならなくなり、その社会的地位の低下が不可避となったのである。

後に第2代大統領になるジョン・アダムズ (John Adams) も、タヴァンの軒数が増えることに憂慮した1人だった。若き日の彼は、1760年にマサチューセッツ湾植民地のプレイントリーのタウンミーティングにおいて、ライセンスの数を減らすよう働きかけた。アダムズは、過当競争に陥ったタヴァンの中には「利益を増やす目的で頹廢的な人 (飲酒中毒者) に対しても、酒類を売らざるをえなくなっている者もいる」と主張した。<sup>24</sup>

しかし、このような「警告」に耳を傾ける参加者は少なく、アダムズは彼らの多くから嘲笑されることになった。多数派の中には、過度の飲酒には反対した者もいたが、そのような人たちでさえ、タヴァンが果たす役割については十分に理解していたと考えられる。彼らにとって、タヴァンの増加は、たんに飲酒する場所が増えたのではなく、むしろそれは、さまざまな機能をもつ生活に必要な「空間」が拡大することを意味したのである。

## II：気分転換の場としての空間

もしタヴァンが、旅行者には宿泊施設を提供し、地域住民へは酒類を販売するだけの店舗であったならば、アダムズの考えに同調する者はもっと多くいたかも知れない。しかし当時の人たちは、タヴァンをそれ以外の点においても不可欠なものと考えたのである。それは、そこが彼らの生活と関わるさまざまな機能を有する「万<sup>ユテリテイ・インスティチュション</sup>能施設」だったからで、この点で、植民地時代の社会史研究の観点からもその存在は注目に値する。<sup>25</sup> 以下、タヴァンが不可欠であったという点を検証するのであるが、ここでは三つの「空間」、すなわち気分転換の場としての空間、社会的機能をもつ空間、そして独立の気運を育む空間に分けて論じてみたい。

まず最初に、タヴァンが気分転換の場所として機能した点を取り上げる

ことにする。新大陸に入植した人たちは、さまざまな苦難に遭遇しながら、生存を賭けて緊張の日々を送っていた。しかし、当初植民地にはそのような場所はなく、厳しい生活の中に潤いを見いだすことは困難を極めた。そこで登場したのがタヴァンであり、気分転換を図れることが、この施設にまずもって求められた。指導者たちは、そのような場所の必要性を認識していたため、例えばマサチューセッツ湾植民地政府が1651年にジョン・ヴァイオール（John Vyall）という人物に付与したタヴァンのライセンスには、「新しい教会に隣接する場所において……公共娯楽場」<sup>コモン・エンターテイメント</sup>を経営することと明記されていた。<sup>26</sup> この「新しい教会」とはボストンに建てられた第二教会<sup>セカンド・チャーチ</sup>のことで、「ジョン・メイオウ（John Mayo）やインクリース・マザー（Increase Mather）の説教を聴きに行こうとする喉の乾いた<sup>つみびと</sup>罪人」たちのために、このタヴァンは営業するよう求められたのである。<sup>27</sup>

植民地時代におけるタヴァンでの飲酒に関して、教会との関係を抜きにしては語れない。今も触れたように、通常タヴァンは「教会に隣接する場所」に建てられたのであるが、その理由は教会行事と飲酒との密接な関係にあった。

植民地建設に際して宗教が大きな役割を果たしたニューイングランドだけではなく、南部や中部の植民地においても、人びとはさまざまな宗教的行事に参加するため、教会へ足を運んだ。礼拝者の中には馬車に長時間揺られて来る者も少なくなく、彼らは行事が始まる前に、すでに休息を必要としていたのである。また、牧師による祈祷や説教は、ニューイングランドでは厳寒の冬も暖房のない教会堂で行われ、昼休みを挟んで長時間におよぶことも珍しくなかった。したがって、「長い礼拝を終えて疲労困憊した者が、タヴァンのタップルーム（パールーム）やラウンジで、休息や<sup>リフレッシュメント</sup>軽い飲食物を求めた」ことは、十分に理解できた。<sup>28</sup>

聖職者や住民が教会へ集まるのは、定期的に行われる祈祷や説教だけが目的ではなかった。牧師の叙任式<sup>オーディネーション</sup>、洗礼式、結婚式、葬式、宗教的祝祭行事<sup>パプティズム</sup>、宗教会議、<sup>シノッド</sup>教会会議<sup>コンヴェンション</sup>など不定期的な集まりについても、枚挙にいとま



がない。そして、教会での行事が終わると、参加者はほぼ例外なくタヴァンへ移動した。例えば、マサチューセッツ湾植民地のウォーバーンの教会で1729年に行われたエドウィン・ジャクソン (Edwin Jackson) 牧師の叙任式では、厳かに行われた式典終了後にタヴァンへ直行した参加者たちは飲酒を楽しんだが、このとき飲用された酒類 — 林檎酒6.5樽、ワイン25ガロン、ブランディ2ガロン、そしてラム酒4ガロン — の費用は、すべて「タウンの財源から支払われることになっていた」のである。<sup>29</sup>

教会が行う行事の中には、初めからタヴァンの「裏部屋」<sup>バックルーム</sup><sup>30</sup>を使用することで移動の手間を省くものさえあった。聖職者を中心とした会合にはこの傾向が強く、ある「タヴァンで開かれた監督教会派の教区会議では、教会の予算を使って美味しいラム酒を飲むことが主な仕事だった」と参加者の1人が、自戒の念を込めて書き残している。<sup>31</sup>

飲酒以外にも、人びとはタヴァンで気分転換を図ることができたが、その代表的なものとしてダンスについて見てみたい。一般に、ダンスホールが独立した建物になるのは20世紀に入ってからで、特に「ジャズ・エイジ」と呼ばれた1920年代に増えた。それ以前に屋内でダンスをする場合は、酒場の裏部屋やホテルの「舞踏場」<sup>ホールルーム</sup>が使われたが、これは植民地時代のタヴァンからの伝統であった。入植後間もないころ、ニューイングランドの各地では、タヴァンにおいてダンスに興じることが、一時的に法律によって禁止されたことがあった。ピューリタンの厳格な信仰理解によれば、それは「快楽を抑制することを目的とした立法」の一つだった。<sup>32</sup>しかし、このような禁欲的な立法も、植民地社会が世俗化をとまなびて拡大してゆくと、変更がなされるようになったのである。

植民地時代の後半から建国期にかけて建てられたタヴァンには、舞踏場が設けられるところもあったが、多くの場合は裏部屋との兼用だった。しかし、中にはコネティカット植民地のウッドベリー近郊に1754年に建てられた「カーティス・ハウス」のように、ダンス専用の舞踏場が2階を占有するタヴァンもあった。ちなみに、これを建ててその経営者になったのは

アンソニー・ストダート (Anthony Stoddart) という人物で、彼は牧師の息子だった。<sup>33</sup>

通常、タヴァンへやって来たのは男性の客で、女性がそこで飲酒することは、多くの植民地において慣例上認められていなかった。それでも、彼女たちがタヴァンとまったく縁がなかったわけではない。1669年のプリマス植民地では、安息日にタヴァンで飲酒したために咎められた4人の客のうち2人が女性であったという記録も残っている。<sup>34</sup> また、特別な場合には、女性によるタヴァンでの飲酒が許された。例えば、「厳しかった旅の疲れを癒すために訪れた旅行者」であれば、女性が「水で薄めて甘さをきかしたリキュール」を飲むことは黙認された。<sup>35</sup> さらに、先ほどあげた結婚式や葬式などの教会行事後に開かれる酒宴に参加したり、ダンスをしにやってくる場合も、当然のことながら大目に見られたのである。

ところで、タヴァンが提供した気分転換を図るものの中に、動物を使った見せ物がしばしばあった。マサチューセッツ湾植民地のセイレムにあった「ブラック・ホース」では、ヘラジカ、セイウチ、ラクダ、ライオン、ヒョウなど、珍しいが実在する動物を見せたという記録が残っている。しかし、どのような動物なのかが分からない場合もあった。ニューヨーク植民地では、「カナダの大森林で生け捕った驚異の巨大怪獣」が、ジェームズ・エリオット (James Eliot) という人物の経営するタヴァンで見ることができたという新聞記事が残っている。<sup>36</sup> また、フィラデルフィアでは、「インディアン・キング」というタヴァンの経営者オーウェン・オーウェン (Owen Owen) が、「頭がひとつ、……胴体がふたつに分かれ、足が8本、尾が2本ある……化け猫」を見せるという宣伝を、1737年3月発行の『マーキュリー』紙に載せている。<sup>37</sup> 「巨大怪獣」や「化け猫」の正体が何であったのか定かではないが、これらはタヴァンと動物が結びつく一例を示している。

この他にも、動物との関係で有名になったものとして、独立革命期にコネティカット植民地のフェアフィールドに建てられた「ベンソン・タヴァ

」がある。そこは、後にアーロン・バー (Aaron Burr)、ダニエル・ウェブスター (Daniel Webster)、アンドルー・ジャクソン (Andrew Jackson) などが訪れるのであるが、そもそもそこが有名になったのは、アメリカ最初のサーカス団と言われる「ヴァン・アンバロウズ」(Van Amburgh's) がこのタヴァンを拠点にしていたからだ。このサーカス団の呼び物は、何と言っても象を登場させた見せ物であった。象たちは「ベンソン・タヴァンに隣接する巨大な納屋で馬と一緒に飼われていた」が、そのような家畜小屋があったのは、そこが駅馬車の中継地として使用されていたためであった。<sup>38</sup>

また、タヴァンで見ることができたさまざまな格闘技の中には人間同士が闘うボクシングのほか、やはり動物を使ったものが多かった。それには熊や牛に犬をけしかける「熊いじめ」や「牛いじめ」、そして鶏同士を戦わせる「闘鶏」などが含まれた。このような「血生臭い興行は、……タヴァンの屋内でも屋外でも行われたが、微酔い気分の観客たちはそれを見物しながらの賭け事」も楽しんだ。<sup>39</sup> タヴァンでこれらを賭け事の対象にすることは、ニューイングランドにおいて当初はダンスと同様に禁止される傾向にあったが、それは徐々に黙認されるようになった。<sup>40</sup>

これらの興行の中で、とりわけ闘鶏は18世紀にはタヴァン文化の一部として見られるようになった。建国期にニューイングランドからヴァージニア邦にやって来たアイカン・ワトソン (Eikan Watson) は、「幾つかのタヴァンが集まる広場の中心に大きな闘鶏場が造られ、その周りを下品で低俗な人も上品ぶった人も取り囲んでいた」と書き残している。<sup>41</sup> さらに、立派な施設も現れるようになり、フィラデルフィアのウィリアム・クック (William Cook) は、建国期に「円形の闘鶏場とそれを囲む75の観客席を、自らが経営するタヴァンの中に設営した」ほどである。<sup>42</sup>

### Ⅲ：社会的機能をもつ空間

前節では、植民地時代のタヴァンが、気分転換を図る場になったという意味で共同体にとって不可欠な空間だったことを論じたが、ここでは、社会的機能を果たしたという点を取り上げてみたい。具体的にそれは、タヴァンが情報センター、商取引の場、投票場、裁判所などとして機能したことを意味する。

入植が始まって間もないころ、情報は人びとがもち寄ることでのみ収集しえた。したがって、地域住民が集まる場所——当初は主に教会とタヴァン——が、情報センターになるのは当然の結果だった。特に、旅行者が訪れるタヴァンは、他の共同体や植民地に関する情報もたらされたため、もっぱら地元の情報しか集まらない教会よりも重要と言えた。

その後各地で新聞が発行されるようになると、タヴァンはそれをいち早く入手して店内に置くことで、提供できる情報量を増やせた。当初は地元紙だけであったが、植民地社会が成熟してくると、駅馬車などによって遠方で発行されたものも運べるようになったため、購読できる新聞の種類は増えたのである。<sup>43</sup> そもそも植民地時代の新聞で、最初に成功したのは1704年4月24日にボストンでジョン・キャンベル（John Campbell）によって発行された『ボストン・ニューズレター』であったとされる。<sup>44</sup> 植民地時代の新聞は、言うまでもなく現代人が目にするものとはまったく異なっていた。当時、人口が少なく、印刷技術が未発達だったため発行部数は限られており、また不定期的な発行が一般的だったが、一部には定期的なもの——週刊もしくは隔週——もあった。

したがって、時宜を得た記事を載せるべきという考え方が未だ確立されておらず、実際に書かれたものはかなり古い事柄や醜聞、さらには百科事典のような啓蒙的な内容が多かった。さらに、植民地や本国の政治体制などを批判した場合は、反逆罪で裁判にかけられることもあったため、政治に関する記事は、独立革命期まで相対的に少なかった。ただし、イギリス

本国で発行された新聞の記事を引用したヨーロッパ大陸に関する政治・経済情報はしばしば載せられたが、一般の関心は低かった。

黎明期の新聞は質量ともに十分なものとは決して言えなかったが、それでも店内にそれを置くことによって、タヴァンが人びとにより多くの情報を提供しえたのは事実であった。ちなみに、1765年の時点で、新聞を定期購読していた白人の家庭は5パーセントにも達していなかったため、タヴァンに置かれた新聞は、そこを訪れる人にとって重要な情報源と言えたのである。<sup>45</sup>

ところで、多くのタヴァンには掲示板が設置されており、「タウンミーティングの開催予告、選挙通知、植民地議会で成立した新しい法律、そして行政命令」などが張り出された。<sup>46</sup> また、タヴァンで行われる商取引に関する情報も、しばしばそこに載せられることもあった。ニュージャージー植民地は、取引の活性化を促す手段として法律を成立させたが、それにはタヴァンが「公に商取引を行う場所」であると明記されている。<sup>47</sup> タヴァンにおいて、遠方からやって来た商人を囲んで行われる情報交換は貴重であり、さらに彼がそこで得た情報が次に訪れる共同体へと伝えられることで、取引の輪は広がるのであった。

経済活動が活発になると、特定のタヴァンに特定の業者が集まることもあった。ニューヨークのウォール・ストリートとウォーター・ストリートが交わる場所にあった「トンタイン」へ、18世紀後半には船主や船長が集まるようになり、そこで彼らは商人を交えて通商に関する情報を交換した。<sup>48</sup> また、マサチューセッツ湾植民地のレキシントンに17世紀末に建てられた「マンロウ・タヴァン」は約1世紀半の長期にわたり営業を続けたが、そこは家畜商人が集まる場所として知られるようになった。このタヴァンへは、「ニューハンプシャーやヴァーモント、そしてカナダの境界地方」からも家畜商がやって来て商談が行われた。タヴァンの敷地内には家畜小屋をかねた大きな納屋があり、「馬なら約100頭を中で飼うことができたほか、周囲に牧草地を所有しており、200頭から300頭の家畜の放牧」が

可能であった。<sup>49</sup>

この他、タヴァンが果たした社会的機能に、選挙に際して投票場として使用されたことがあげられる。当初、タブルームで投票は行われたが、建物が大きくなって裏部屋が設けられるようになると、新たにそこが使用された。タヴァンが投票場になったのは、他に適切な施設がなかったとか、共同体の中心に位置していたために有権者が集まり易かったということだけが理由ではなかった。選挙と飲酒が強く結びついていたことも、見逃されてはならない理由であった。

候補者が選挙運動の一環として、有権者に酒を振る舞うという習慣は、南部を中心に植民地時代からあり、ペンシルヴァニア植民地など一部の地域では法律によって禁止されたが、それ以外では独立後も長く存続した。タヴァンが特定の候補者と結びつくこともあり、とりわけ店主が地域社会の名士である場合は、その候補者のための会合を自らの店で開催するなど大きな影響力をもったのである。<sup>50</sup> 投票日当日にも、各候補者ともタヴァンで酒を振る舞ったのであるが、同じ場所で投票するということが決して珍しくはなかった。

27歳でヴァージニア植民地議会の代議員になったジョージ・ワシントン (George Washington) も、そのような社会慣習に従った1人だった。彼は1758年に立候補したとき、「合計160ガロンものビール、ワイン、<sup>アップル・サイダー</sup>林檎酒、パンチ、ラム酒をフレデリック郡の有権者に供応した」ため、当選することができたと考えた。<sup>51</sup> 「はじめに」の中で触れたように、20世紀への転換期の禁酒法運動が地方政治と結びつく酒場を腐敗の温床と攻撃したが、その種がすでに植民地時代に蒔かれていたことは興味深い。

植民地時代のタヴァンは、裁判に際して法廷としても使われた。その理由は、投票の場合と同様に他に適切な施設がなかったことや、そこが集まりやすい場所であったこと以外にもあり、それはやはり飲酒との関係であった。当時、植民地の首都など大きな町以外には裁判所として独立した建物はなく、また常駐する判事もいない時代であった。しかし、植民地時

代末期には地方にも独立したものが建つようになり、中にはニューヨーク植民地のニューロウシェルに建てられた「ベズリー・タヴァン」のように、後に本物の裁判所へ衣替えしたところもあった。<sup>52</sup>

植民地時代、<sup>カウンティ・コート</sup>地方裁判所が判事を巡回させて裁判を行わせるという制度があった。彼はタヴァンに宿泊しながら一つの共同体に数日滞在し、その間にいくつかの訴訟を処理したのである。巡回する判事の旅費は植民地政府によって負担されたが、旅費の中にはタヴァンでの飲酒分も含まれた。例えば、ニューハンプシャー植民地が、あるタヴァンから支払いを求められた1772年4月15日付けの請求書によると、その日に判事は「1鉢<sup>ボウル</sup>のパンチ、ワイン2本、マグ・カップ1杯のラム・フリップ、合計8シリング2ペンス分の酒」を飲用したという記録が残されている。<sup>53</sup>

巡回中の判事が飲酒するのは、必ずしも1日の仕事が終わった後の夕食時だけではなかった。そもそも植民地時代のアメリカでは、朝昼晩すべての食事に量こそ少ないが飲酒をとまなうことが一般的であった。当時、非衛生的とされた水よりも、酒類の方が安全であると多くの人びとによって考えられたため、食事時以外にも就寝前や起床後、そして仕事途中の休息時の飲酒さえも、通常的生活習慣の一部として許されたのである。したがって、判事にとって、タヴァンを裁判所として使うことは、そのような習慣を実践するのに好都合だった。ちなみに、このような回数は多いが量の少ない飲酒は、「<sup>ドラム・ドリンキング</sup>微量飲酒」と呼ばれていた。

#### IV：独立の気運を育む空間

前節で見たように、タヴァンはたんに気分転換を図るだけの空間ではなく、情報収集や商取引、さらには投票や裁判が行われる社会的空間でもあった。しかし、タヴァンが果たした機能はこれらのものだけではなかったのである。それは、ここが多様な目的で開かれる会合の場所であったことを意味するのであるが、中でも注目すべきは植民地の独立に結びつく会合で

あった。これに関連して、まず軍事訓練にまつわるものを見てみたい。

植民地時代、アメリカには常備軍はなく、散発的に起こるネイティヴ・アメリカンとの小競り合いに対応したのは、本国から派遣された正規軍ではなく、その多くは植民地人によって組織された民兵であった。ただし民兵は、基本的に自らが住む地域社会を防衛するために組織されたもので、遠方の地を転戦することはなかった。したがって、例えば植民地時代末期に起こった「フレンチ・アンド・インディアン戦争」に参戦した遠征軍へは、「民兵ではなく植民地での募兵に応じた若者で、俸給に期待した貧農出身者」が加わった。<sup>54</sup>

平和主義を標榜するクエーカー教徒が多かったペンシルヴァニア植民地をのぞき、各植民地とも軍事防衛に関する法律を制定し、健康な自由白人の男性に、武器の保持、訓練への参加、そして有事の際の徴兵応諾などを義務づけた。もし、これらの義務を拒絶すれば、罰金刑や鞭打ちなどの罰則が科せられた。部隊を束ねる民兵指揮官は、当初は総督によって任命されたが、植民地時代の後半には選挙によって選ばれるところも増えた。一方植民地議会は、予算を確保したり規律を定めることで、民兵制度を機能させようとした。そして、指揮官を中心として定期的に訓練が行われたのだが、そのとき集散場所として使われたのがタヴァンだったのである。

まず、タヴァンに集合した民兵たちは、指揮官に率いられて野外演習に適した場所に行き、射撃や行軍などの訓練を受けた。厳しさは共同体によって異なっていたが、一般的に人口が多く社会が比較的安定していた海岸線に近い地域よりも、ネイティヴ・アメリカンとの小競り合いがしばしば起こった内陸部の方が、訓練は熱心に行われたと考えられる。厳しいものであったか否かは別にして、参加者にとっての楽しみは訓練後にタヴァンへ戻って飲酒することで、誰もが緊張からの開放感に浸るひとときだった。

民兵指揮官の中には自らの支払いで酒を振る舞う者がいたため、参加者たちは彼が酒好きで、自分たちのために気前よく奢ってくれることを期待



した。はじめに指揮官が振る舞った場合でも、その後はお互い奢り合い、「総督から指揮官に至るまで、植民地の指導的立場の人たちすべてに敬意を表して乾杯」しながら飲酒を重ねた。<sup>55</sup> また、訓練終了後の飲酒に公金を使用される場合も多く、例えばコネティカット植民地では「年間7～8,000ポンドの金が使われた」と推定されている。確かに、このような「懇親会」は住民と指揮官との意思疎通を図ったり、また住民同士の連帯感や防衛意識を育む絶好の機会にもなったのであるが、「軍事訓練という本来の目的に必要な予算がなくなる」ことを危惧する者もいた。<sup>56</sup>

ところで、植民地時代を通して住民たちは、タヴァンにおいて地域社会の行政や植民地全体の政治などについて語ることがよくあった。これは、初期の頃の入植者たちがタヴァンに集まって、例えばコミュニティを流れる川のどこに橋を架けるべきかとか、共同墓地をどこに造るべきかなどの問題を話し合ったタウンミーティングの伝統と言えるものだった。当初は、このような身近な問題について議論することが多かったが、時間の経過とともに「町や村の役人たちも加わって」植民地全体の政治に関する議論も行われるようになり、タヴァンは「地域社会における政治談義の場」として機能したのである。<sup>57</sup>

政治的に大きな意味をもつということで注目すべきは、植民地時代の末期にタヴァンが果たした役割である。フレンチ・アンド・インディアン戦争が終結した1763年以降、植民地人たちは独立への気運を徐々に高めていった。最終的に独立を主張するようになる人々（以下、「愛国派<sup>ベイトリオッツ</sup>」）にとって、本国政府がとった印紙条例などの課税政策は、自由と権利を踏みにじるものとして黙許し難く、彼らはタヴァンに集まっては、国王をはじめ本国政府の指導者たちを公然と非難するようになった。イギリスの支配層は、そのような反英的雰囲気<sup>ホットヘッド・オブ・セディション</sup>が満ち溢れたタヴァンを「騒乱の温床」と非難したが、一方愛国派にとって、そこは「自由の育成施設<sup>ナーサリー・オブ・フリーダム</sup>」だったのである。<sup>58</sup>

独立の是非を議論する会合がタヴァンで開かれたことは広く知られる事

実だが、愛国派にとって、その時の飲酒はあたかも自らの解放と自由を象徴する行為と見なされた。タヴァンの中には、周囲にある大きな木を「自由の木」と称して、その枝にさまざまな反英スローガンを書いたものを結びつけたり、中には本国政府指導者の人形を縛り首にして吊すところも現れるようになった。特に、ボストンのハノーヴァー・スクエア（当時）にあったまさにその名を冠した「リバティー・ツリー・タヴァン」は有名であった。ここでは「……その木の下そしてタヴァンの建物の中で多くの愛国派の人たちは会合を開いて氣勢をあげた」のであるが、日頃からそれを腹立たしく思っていたイギリス兵が、「飲んだ勢いで」木を切り倒すという出来事もあった。<sup>59</sup>

実際に、イギリス本国への抵抗が始まって、やはりタヴァンは重要な役割を演じ続けた。植民地人による「最初の公然たる革命行為」とされるガスピー号焼き討ち事件は、その一例としてしばしば語られる。1772年6月にロードアイランド植民地のナラガンセット湾で本国の密貿易監視艇のガスピー号を沈めた人たちは、プロヴィデンスにあった「サビン・タヴァン」の一室で、「遠征隊を組織するための会合」を開いたのである。<sup>60</sup> また、愛国派がネイティヴ・アメリカンに変装して船に乗り込み、積み荷の茶を海に投げ捨てるという有名なボストン茶会事件（1773年）の計画が立てられた場所も、「グリーン・ドラゴン」というタヴァンだった。<sup>61</sup>

さらにニューヨーク港でも、このボストンでの出来事に触発されて、翌年に同様の事件が起こっている。サミュエル・フラーンシス（Samuel Fraunces）という人物が経営する「フラーンシズ・タヴァン」に、「自由の息子たち」や「自警団」の活動家が集合して、東インド会社専用の栈橋に係留されていたロンドン号という茶を運んできた船の襲撃作戦が練られた。そして彼らは、ボストンと同じように「茶箱の蓋をこじ開けて、船荷を海上に投棄し、……ニューヨーク版茶会を楽しむこと」ができたのである。<sup>62</sup> ちなみに、このタヴァンは、事件後大陸会議の結成に向けて、マサチューセッツとニューヨークの両植民地の代表が会合を開いた場所として

も知られている。

戦争は1775年4月19日にレキシントンとコンコードで始まるのであるが、これらの戦闘に際しても、タヴァンは「ミニットマン」たちの集合場所だった。レキシントンでは、開戦前夜の4月18日に、イギリス国王への反逆罪に問われていたジョン・ハンコック（John Hancock）やサミュエル・アダムズ（Samuel Adams）の逮捕と、違法に保管されているとされた兵器や弾薬を捜索するために、ボストンから派遣されたイギリス軍パトロール隊が、そこを通過するという情報が流された。それを聞いたミニットマン約40名は「バックマン・タヴァン」に集合してなりゆきを見守ったが、この時は武力衝突にいたらなかった。一方コンコードでは、4月19日にイギリス軍本体が向かってくるという情報で鳴らされた町役場の鐘の音を聞いて、町の中心に位置した「ライツ・タヴァン」に、ミニットマン3中隊が結集した。彼らはコンコード川に架かるノースブリッジでの歴史に残る戦闘に参加したが、このタヴァンは、その後一時的にイギリス軍の前線司令部として使用されたのである。<sup>63</sup>

独立革命戦争が始まっても、タヴァンの重要性に変化はなかった。まず、大陸軍の部隊を編成する作業が行われたとき、そこは「兵士集合場所」<sup>リクルーティング・ステーション</sup>として愛国派が武器をもって集まる場所になった。このとき、武器や弾薬が不足している者へは、そこで補充がなされた。コンコードにあった「コロニアル・イン」は、まさにそれができる場所で、3棟あったタヴァンの建物の一つは武器庫にもなっていた。

一方、ニューヨークのワシントン・ハイツにあった「ブルー・ベル」というタヴァンは、「傷ついた兵士たちを保護する施設」、つまり野戦病院として機能した。その他にも、軍法会議の開催場所、捕虜収容施設、兵舎、前線司令基地などとしても使用された。また、戦争中に各植民地の結束を図るため、指導者たちは各地のタヴァンを訪れながら地元の愛国派と会合を重ねたのである。<sup>64</sup>

このように、植民地が本国からの独立を勝ち取る過程で、タヴァンが果

たした役割は非常に大きかった。トマス・ジェファソン (Thomas Jefferson) が独立宣言文の草稿を書き上げたのがフィラデルフィアの「インディアン・クイーン」というタヴァンだったことは、独立の歴史がそこで作られたことを、まさに象徴するエピソードとしてあげられよう。<sup>65</sup>

## おわりに

アメリカ社会史家マデロン・パワーズ (Madelon Powers) は、20世紀への世紀転換期の酒場は「二重性、……つまり営利追求の性格および共同社会的性格を帯びていた」と論じた。酒場が集まる人たちは、「顧客」であると同時に「仲間」でもあるというのだ。<sup>66</sup> 従来の禁酒法運動に関する研究では、酒場はあくまで「客」に酒類を販売するビジネスライクな場所であり、すでに「はじめに」の中でも触れたように、売り上げを伸ばす目的で売春やギャンブルなどの悪徳と結びついたため、多くの住民から敵視されたことが描かれてきた。その一方で、人びとが「仲間」として集まる酒場の「共同社会的性格」についての研究は十分になされてこなかったため、パワーズはその必要性を強調したのである。

本論文は、20世紀への世紀転換期の酒場について論じたパワーズの視点を、植民地時代のタヴァンに当てはめたものである。これまで述べてきたように、共同体が発展していく過程で、タヴァンはまさに「地域社会の中心」に位置した。初期入植者たちは、飲酒や気分転換のためだけではなく、多様な目的をもってそこへ集まったのだが、それらの中には、葬式、結婚式、牧師の叙任式、教会会議のような宗教的行事に付随する会合とともに、軍事訓練終了後に開かれた懇親会や舞踏会などの社交の範疇に入るものも含まれていた。また、そこはタウンミーティングや商取引の場になったほか、投票場や裁判所としても使われたのである。

タヴァンが果たしたこれらの機能や役割の多くは、植民地時代の初期だけではなく、18世紀を通して目撃されるのであった。さらに、植民地時代

の終盤には、そこは駅馬車の中継地として人と物と情報が集まる重要な場所になった。特に、イギリス本国との関係が問い直されるきっかけになったフレンチ・アンド・インディアン戦争後、それが果たした役割は一層重要になった。タヴァンでは、特定の政治クラブの会員だけではなく、一般の客たちもまた、イギリス国王の臣下であり続けるべきか否かの議論を闘わせた。そして独立戦争が始まると、その一部は民兵たちが集合したり武器を保管するなど軍事戦略的にも重要な場所になった。このように、植民地時代を通して、タヴァンは個々の住民にとって共同体意識を育む空間であり、そこを訪れる人たちはたんに顧客としてではなく、お互いが仲間であるという意識を共有していたのである。

## 註

- 1 禁酒法運動を肯定的に論じた研究は数多くなされてきたが、以下にその一部を挙げておく。John M. Barker, *The Saloon Problem and Social Reform* (1905; reprint, New York: Arno Press, 1970); Ruth Bordin, *Woman and Temperance: The Quest for Power and Liberty, 1873-1900* (Philadelphia: Temple University Press, 1981); James Timberlake, *Prohibition and the Progressive Movement, 1900-1920* (New York: Atheneum, 1970).
- 2 これについては、拙稿「アメリカ社会における酒場の盛衰 — ポストベラム期から全国禁酒法成立まで —」『地域文化研究』第27巻（2001年）63-90を参照されたし。
- 3 このような議論はヨーロッパ社会にも当てはめられる。例えば、近代フランスの「居酒屋」は民衆が集まる「ソシアビリテの重要な場」であったという視点から、個と共同性の関係を論じた研究もある。喜安朗『近代フランス民衆の〈個と共同性〉』（平凡社、1994）、68-105。
- 4 本稿のタイトルの一部としてすでに使用しているこの語は、第一節で説明されているように、酒類販売を行うだけではなく宿泊の施設をもった店舗を意味したため、「居酒屋ホテル」と訳すことも可能である。しかし、この邦語訳ではその実態が十分に伝わらないと思われるので、ここでは訳出せずそのまま「タヴァン」とした。

また、酒類販売と宿泊の機能を併せもつ店舗は、当時タヴァン以外にも「イン」(inn) や「オーディナリ」(ordinary) などとも呼ばれていた。これらは、あくまでも呼称の違いであって、提供される奉仕の種類についての違いはほとんどな

かった。また、「ホテル」という言葉が広く使用されるようになるのは独立後暫くしてからのことで、それは宿泊施設としての建物であって、必ずしも酒類を提供する場所を兼ね備えたものではなかった。

一般的に「タヴァン」という言葉は、ニューイングランドや中部植民地を中心に使われた。これに対して、「イン」はペンシルヴァニア植民地、そして「オーディナリ」はプリマスなど一部のニューイングランド植民地やヴァージニア植民地など南部で、「タヴァン」よりも頻繁に使用されていたが、実際にはそれほど厳格に区別して使用されていたわけではなかった。ただし、「イン」と「オーディナリ」はイギリス本国でも広く使用されていたため、独立革命期には反英感情から「タヴァン」が主流になった。したがって、本稿では固有名詞以外は、すべて「タヴァン」で統一することとした。Daniel Whiterner, *Prohibition in North Carolina, 1715-1945* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1945), 3 & 34; Dean Albertson, "Puritan Liquor in the Planting of New England," *The New England Quarterly* XXIII (December, 1950), 484; Elise Lathrop, *Early American Inns and Taverns* (New York: Robert McBride & Co., 1926), viii.

- 5 Edward Field, *The Colonial Tavern: A Glimpse of New England Town Life in the Seventeenth and Eighteenth Centuries* (Providence R. I.: Preston & Rounds, 1897), 1.
- 6 Alice M. Earle, *Stage-Coach and Tavern Days* (New York: Macmillan Co., 1900), 2.
- 7 Daniel Dorchester, *The Liquor Problems in All Ages* (1884; reprint, New York: Arno Press, 1981), 110.
- 8 John Krout, *The Origin of Prohibition* (New York: Russel and Russel, 1925), 8f.
- 9 William Shepherd, *History of Proprietary Government in Pennsylvania* (New York: Columbia University, 1896), 80.
- 10 C. C. Pearson and J. Edwin Hendricks, *Liquor and Anti-liquor in Virginia, 1619-1919* (Durham, N. C.: Duke University Press, 1967), 16.
- 11 Cotton Mather, *Magnalia Christi Americana* (Cambridge, Mass.: The Belknap Press, 1877), 192.
- 12 J. C. Furnas, *The Life and Times of the Late Demon Rum* (New York: G. P. Putnam's Sons, 1965), 24f; Krout, 44.
- 13 例えば、1653年と1667年のハーヴァードでは、ともにタヴァン経営者の息子であるジョシュア・ロング (Joshua Long) とジョン・ハリマン (John Harriman) が、牧師を親にもつ学生たちよりも上位に置かれたが、これは「当時、娯楽を提供する施設の管理運営者に対して払われた人びとの畏敬の念を明確に表した」ものと考えられる。American Antiquarian Society, *Proceedings of the American Antiquarian Society* IX (Worcester, Mass.: 1895), 50.
- 14 Ian R. Tyrrell, *Sobering Up: From Temperance to Prohibition in Antebellum America, 1800-1860* (Westport, Conn.: Greenwood Press, 1979), 23.
- 15 G. Thomann, "Colonial Liquor Laws," in United Brewers' Association, *Liquor*

- Laws of the United States: Their Spirit and Effect* (New York: United Brewers' Association, 1887), 10; Ernest H. Cherrington, *The Evolution of Prohibition in the United States of America* (Montclair, N. J.: Patterson Smith, 1969), 20 & 23; Edward G. Baird, "The Alcohol Problem and the Law: The Beginnings of the Alcohol-Beverage Control Law in America," *Quarterly Journal of Studies on Alcohol* 7 (1946-47), 133.
- 16 Henry G. Ashmead, *The History of Delaware County, Pennsylvania* (Philadelphia: L. H. Everts & Co, 1884), 189. ちなみに、現在でもジガーは酒類の分量を量る容器として扱われており、その量は約45ミリリットルである。
- 17 Albertson, 485.
- 18 Baird, 117ff.
- 19 Mark E. Lender and James K. Martin, *Drinking in America: A History* (New York: Free Press, 1982), 27; Richard L. Bushman, *From Puritan to Yankee: Character and the Social Order in Connecticut, 1690-1765* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1967), 110.
- 20 Alice M. Earle, *Customs and Fashions in Old New England* (New York: C. Scribner, 1893), 194; Field, 15.
- 21 John Winthrop, *The Journal of John Winthrop, 1630-1649* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1996), I-120.
- 22 Albertson, 483ff.
- 23 William T. Youngs, Jr., *God's Messengers: Religious Leadership in Colonial New England, 1700-1750* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1976), 6; W. J. Rorabaugh, *The Alcoholic Republic: An American Tradition* (New York: Oxford University Press, 1979), 33.
- 24 L. H. Bullerfield, ed., *Diary and Autobiography of John Adams* (Cambridge, Mass.: Belknap Press, 1961), I-128f.
- 25 Tyrrell, 21.
- 26 Field, 1f.
- 27 William Bliss, *Side Glimpses from the Colonial Meeting-House* (New York: 1894), 13f.
- 28 Field, 3f; Lathrop, 77.
- 29 Charles W. Taussig, *Rum, Romance & Rebellion* (London: Jarrolds Publishers, 1928), 214; Dorchester, 137.
- 30 「裏部屋」(backroom)とは植民地の初期にはなかったが、建物が大きくなるにしたがい設けられるようになった部屋。そこは必ずしも店の奥にあった部屋とは限らず、時には階上にあり、舞踏会や政治クラブの集会など貸し切りで使用される傾向にあった。また、ダンス場として使われることが多い場合は、「舞踏場」と呼ばれることもあった。
- 31 Krout, 39.

- 32 Albertson, 489.
- 33 Lathrop, 59.
- 34 John Demos, *A Little Commonwealth: Family Life in Plymouth Colony* (New York: Oxford University Press, 1970), 90.
- 35 Rorabaugh, 12.
- 36 Earle, *Stage-Coach*, 197; リチャード・アードーズ著 (平野秀秋訳) 『大いなる酒場——ウエスタンの文化史——』(晶文社、1984)、240.
- 37 *Mercury*, March 31, 1737 (Philadelphia).
- 38 Lathrop, 51f.
- 39 Tyrrell, 21f.
- 40 初期ニューイングランドでは、このような興行にまつわるものだけではなく、ギャンブルそのものを禁止する共同体も多く、例えばマサチューセッツ湾植民地のアンドーヴァーでは、ダイスやカードなどを使ったゲームが禁止された。Lathrop, 65.
- 41 Krout, 23.
- 42 *Public Ledger*, November 24, 1851 (Philadelphia). この他に、タヴァンの裏部屋などを使って行われるものとして、手品、芝居、楽器演奏、そしてオークションや展覧会などがあった。これらの催しは、必ずしも宿泊客や飲酒客のための余興としてなされるのではなく、別個に企画されることが多かった。それを企画することから、宣伝し入場券を販売することまで、すべては酒場の主人の手によってなされたのである。Taussig, 231; Kym Rice, *Early American Taverns: For the Entertainment of Friends and Strangers* (Chicago: Regnery Gateway, 1983), 117.
- 43 ポストンとニューヨークの間に馬を使った郵便事業が開始されたのは1672年からとされているが、この時期新聞は未だ発行されておらず、主に手紙が騎馬郵便配達人によって運ばれた。一方、駅馬車の営業は18世紀に入ってからのごとで、長距離のものとしては1733年開業のニューヨーク＝フィラデルフィア間が最初で、その後独立革命期を経て18世紀末にかけて全盛期を迎えることになった。フィラデルフィアでは、タヴァンの経営者が駅馬車事業を始めることもあった。ニューヨーク＝ポストン間を1週間程度かけて結ぶルートでは数十カ所の中継所が必要で、実際に10～15マイルに1軒の割合でタヴァンができた。「馬には飼い葉あり、人には酒あり」という看板のかかったタヴァンへ馬車が到着すると、乗客には食事と束の間の休息が与えられ、次の中継所を目指して出発するのであった。Peter Thompson, *Rum Punch & Revolution: Taverngoing & Public Life in Eighteenth-Century Philadelphia* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1999), 145; Lathrop, 28f & 76; Pearson and Hendricks, 113; Oren F. Morton, *A History of Preston County, West Virginia* (Kingwood, West Virginia: The Journal Publishing Co., 1914), 77.
- 44 植民地最初の新聞は、1690年9月25日にポストンで生まれた『パブリック・オカランス』だったが、継続的に発行できなかつたため『ポストン・ニューズレター』



- を最初のものとした。新聞は、当然のことだが比較的人口の多い町で発行されたが、18世紀中頃のボストンでの発行部数は1紙平均約600だった。しかし、その後本国との関係が悪化するにつれて発行部数は増えはじめ、植民地全体で主なものとして38紙が存在した1775年には、1紙平均約2,500部が、タブロイド判の紙を使った4ページ程度のもを標準として発行された。Frank Mott, *American Journalism: A History of Newspapers in the United States through 250 years, 1690-1940* (New York: The Macmillan Company, 1941), 59; Edward C. Lathem, comp., *Chronological Tables of American Newspapers 1690-1820* (Massachusetts: American Antiquarian Society & Barre Publishers, 1972), 2.
- 45 Richard Brown, *The Transformation of American Life 1600-1865* (New York: Hill and Wang, 1976), 52.
- 46 Earle, *Customs*, 196.
- 47 Samuel Allinson, ed., *Acts of the General Assembly of the Province of New Jersey* (Burlington, 1776), 102.
- 48 Lathrop, 33.
- 49 *Ibid.*, 78ff.
- 50 Tyrrell, 207.
- 51 John Kobler, *Ardent Spirits: The Rise and Fall of Prohibition* (New York: G. P. Putnam's Sons, 1973), 32.
- 52 Lathrop, 48.
- 53 Dorchester, 128; Paton Yoder, *Taverns and Travelers: Inns of the Early Midwest* (Bloomington: Indiana University Press, 1969), 95f.
- 54 有賀貞他編『アメリカ史1』(山川出版社、1994)、137-38。
- 55 Albert B. Hart, ed., *Alexander Hamilton's Itinerarium* (St. Louis, 1907), 81f.
- 56 David W. Conroy, *In Public Houses: Drink & the Revolution of Authority in Colonial Massachusetts* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1995), 247f.
- 57 Herbert Asbury, *The Great Illusion: An Informal History of Prohibition* (Westport, Conn.: Greenwood Press, 1950), 6; Pearson and Hendricks, 113.
- 58 Rorabaugh, 35.
- 59 Earle, *Stage-Coach*, 175.
- 60 Mary C. Crawford, *Little Pilgrimages among Old New England Inns* (Boston: L. C. Page & Company, 1907), 121f.
- 61 Rice, 124.
- 62 Lathrop, 37f.
- 63 Concord Chamber of Commerce, *The Lexington-Concord Battle Road: Hour-by-Hour Account of Events preceding and on the History-Making Day April 19, 1775* (Concord, Mass.: Concord Press Corporation, 1975), 8 & 13.
- 64 Lender & Martin, 13; Lathrop, 46 & 86; Earle, *Stage-Coach*, 179.
- 65 Lathrop, viii.

- 66 Madelon Powers, *Faces along the Bar: Lore and Order in the Workingman's Saloon, 1870-1920* (Chicago: University of Chicago Press, 1998), 22.

#### 付記

本稿は、平成13～15年度科学研究費補助金（基盤研究（B）〈近代欧米における「個」と「共同性」の関係史の総合的研究〉代表者 友田卓爾）の研究成果の一部である。

## The Roles and Functions of Taverns in Colonial America

Masaru Okamoto

There have been many scholars who wrote books and research papers on the temperance movement. Starting early in the 19th century, the primary object of this movement was to reduce the consumption of alcoholic beverages by means of the so-called “moral suasion.” The movement, however, came to assume a severe, extreme tone in the latter half of the 19th century, becoming the prohibition movement. In the prohibition movement at the turn of the 20th century, which tried to make manufacture and sale of liquors illegal by legislation, saloons were regarded as a prime target to be expelled from the American soil.

But as Madelon Powers suggests in his *Faces along the Bar: Lore and Order in the Workingman's Saloon, 1870-1920*, if the saloons were viewed from “the other side, the working-class drinkers' side,” they were entitled to be reevaluated as an indispensable place for many people, especially immigrant workers. This point of view could be applied to a drinking place in the colonial period: a tavern.

In many history books on the American colonial life, taverns have often been portrayed as a “community center” like a meetinghouse. There is, however, almost no explanation of why and how they were so important for the colonists. The purpose of this paper is to examine the roles and functions of taverns in order to clarify the meaning of the “community center.”

Colonial taverns were not only the places for drinking and lodging. They were also the places for entertainment to local people. Those who gathered at a tavern enjoyed themselves with dancing, singing, and watching such performances as “bear baiting,” “cockfighting,” “human boxing” as well as drinking and chatting.

Taverns functioned as a courtroom. Colonial governments dispatched a judge of the county court from one town to another, more specifically, from one tavern to another. The judge held courts at the tavern where he stayed, because there were no other suitable places. Taverns also functioned as information and business centers. Notices of town-meetings, of elections, of new laws and ordinances, of auctions, and of business transactions were posted therein.

As time went on and a peaceful adjustment of the grievances of the colonies became impossible, and war clouds hung dark and low, taverns were the “hot beds of sedition.” It was in a tavern that various groups of “patriots” such as the Sons of Liberty held their meetings. It was there that some radical colonists secretly assembled and went out to attack British ships. It was there that recruiting officers had their headquarters. It was there that towns' arms were secreted.

Thus throughout the colonial period, taverns had been the place where people could come together to discuss freely how to build up “the civil community.” In this meaning those who visited there were not only “customers” but also “comrades.”